

和歌山県有田郡有田川町

学生との協働による継続的な棚田保全活動 (棚田ふぁむ)



【地域の基礎データ】

人口：26,325人（令和元年12月末現在）

高齢化率：31.6%（平成31年1月1日現在）

産業：農業（みかん、山椒、花き）、林業 など

【活動の基本情報】

参加学生数：32名（1回生：8名、2回生：10名、3回生：9名、4回生：5名）

活動期間：平成23年7月～

担当教員：大浦由美

1. 活動実施の経緯

有田川町での第19回全国棚田（千枚田）サミット（2013年度）開催決定をきっかけに、2010年に県が企画した「棚田モニターツアー」に当時の観光学部生約20名が参加した。地域の農業者の高齢化とともに耕作放棄地が増加する当地の現状を目の当たりにして、学生側から「棚田保全ボランティア」のアイデアが出されたことをきっかけに、学内で棚田保全ボランティアへの参加者を募り、「棚田ふぁむ」を結成。2011年7月から活動を開始した。



2. 活動の内容

- ・ 農作物の生産：コメ、サトイモ、大根、カボチャ、ゴボウなど
- ・ 農作業支援：サンショ収穫作業の支援、茶摘み・製茶作業の手伝い、草むしり
- ・ 地域活動支援：祭礼への参加、餅つき手伝い、溝普請（水路清掃）、獣害防止柵の見回り
- ・ その他：活動広報誌の作成・配付、大学祭やイベントへの出店（棚田米や番茶を販売）

3. 活動を通じて

本活動は今年で9年目となる。交流会等には毎年卒業生の参加もみられ、幅広い世代が行き交う場となっている。今年度実施した調査*によれば、棚田ふぁむの活動は地元住民に好意的に受け止められているとともに、調査に応じた卒業生19名のうち約半数が卒業後も交流会への参加などの関わりを持ち、約9割が現在の活動にも関心を持ってFacebookなどで情報を見ていることがわかった。今後も定例の活動とともに、地区の現状や必要な支援についての調査活動を継続したい。

*新谷ほのか「域学連携による棚田保全活動の可能性—和歌山県有田川町沼地区を事例に一」（令和元年度卒業論文）

4. 成果物など

棚田ふぁむ

棚田ふぁむの結成

全国棚田サミット開催に向けて、和歌山県が平成22年に開催した棚田モニターツアーに参加、耕作放棄地が増加する棚田の現状を目の当たりにする。和歌山県と有田川町からの棚田保全活動の提案によって学内で参加者を募り、棚田ふぁむ結成。

平成23年度から有田川町沼地区で活動を開始。現在まで10年間活動。当初は棚田の保全を目的に活動していたが、現在は棚田と棚田を保全する地域の人を支える活動をしている。



有田川町沼地区

和歌山県中央部に位置し、「日本の棚田百選」に選定された「あらぎ島」をはじめとして、多くの棚田が点在しています。急傾斜地の棚田が美しく、近年では「ぶどう山椒」の栽培も盛んです。ただ、高齢化が進み、沼地区の人口割合はほとんどは高齢の方が占めています。そのため、棚田やぶどう山椒もいまはその方たちが栽培可能でも、後継問題や自分たちで栽培ができるかという問題が深刻です。



活動内容



田植え

5月



山椒収穫支援

7月



交流会

12月



天神祭

1月

感想・気づき

・ふぁむのおかげで地域で集まることが増えたとし、学生が来ることによって刺激があると話してくれて、少しでも力になれているのだと思うと素直に嬉しかった。自分の事だけを考えたら、もう現状維持が精一杯と言っていて、人口や、若い人が減っていることは思っている以上に深刻なのだと感じた。（勉強会）

・全体のお話を通して、地域の皆さんが本当にふぁむのことを褒めてくださったり、真剣に考えてくださっていることがわかり、純粋に嬉しかった。沼地区の将来についても、私が考えていたよりも前向きに皆さんが考えていらっしゃるってふぁむとしてももっと何かお手伝い出来ないかなと思った。お話の中でもあった様にきっかけづくりにはふぁむがなれたら良いなと思った。ただ、現状維持しか考えられないと仰っていたことが少し悲しかったが、これが沼の現実だと思った。すぐには難しいと思うが、将来的に良い方向に向かえる様にふぁむとして継続的に関わっていきなと思った。また、ふぁむの活動ももっと責任感を持ってしなければいけないと改めて感じた。（勉強会）

・実際に自分で山椒を収穫してみて、先輩方からお聞きしていた山椒収穫の大変さを肌で感じることができました。また、沼地区の方々とコミュニケーションを取ることで、沼の現状や高齢化についてのお話も伺うことができ、良い経験になりました。（山椒収穫支援）